

『池塘集』を読めば女のごゑがする「百年待つてゐてくれませんか」 本田一弘

『池塘集』は、一九〇六年（明三九）刊の最初の口語歌集。作者は青山霞村。刊行当時はほとんど問題にされなかったが、刊行後百年を経て、短歌の世界はすっかり口語短歌の時代となった。「女のごゑがする」は、たとえば「嬉しさのないではないわ五月間きみと二人のない名と思へば」（『池塘集』）等、歌集中にときどき見える女性言葉の入っている歌をさしているのだらう。この歌、わかりにくいのが、「ない名」が歌語「無き名」（男女間のあらぬ噂）の口語訳と分かれれば、意味がとれる。

なお、『池塘集』は、『現代短歌全集・第一巻』（筑摩書房）に収録されているので簡単に読める。

はつ冬のミッドタウンの信号に赤き雨ふり青き雨ふる クリシュナ智子

ニューヨークの中心街をうたいつつ、レトロな味わいをかもしだしている点に注目した。下旬のリフレインが大正期モダンの雰囲気だからだらう。

革命歌失はれし世に歌残り岸上大作没後五十年 佐藤博之

この作者の今月号の八首は、六〇年安保の年に自殺した学生歌人・岸上大作を話題にしている。岸上の歌のボキャブラリイを大胆に引用しつつ、企業内の角逐を表現した冒険作。「一日の弁解相互に抱きつつ一週間をいさかふ起伏」等、注目した作もあったが、ここでは岸上を

短歌の現在

No.367 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

肯定的に見つつ、歴史をうたったこの作をとりあげていた。まだ若い作者が、五十年前の学生歌人を引用したのは新鮮な驚きである。

ハンドベルの中より飛び立つ蝶あまた一人一人の頭にとまる 堀越貴乃

友人の結婚式をうたった五首、どれもなかなかいい。「新郎の姉二人とも美しく何かおそろしと見ておりわれ」は、とくに、この作者独自の感覚が表現されていて注目した。ここでは分かりやすい掲出作を選んでおいた。ハンドベル合奏の音だけをうたっている点が独特。

ムードメーカー三人の笑いにひき込まれ易き隣人易からぬわれ 中西由起子

寄席の歌である。舞台の三人のやりとり、めぐりの人たちの笑い、そうしたその場の空気になじめない「われ」。寄席の歌にしては寂しい。

湯上がりの背拭われて鏡には淡く重なるうつし身ふたつ 真田裕子

二つのうつしみは、同性でもいいが、やはり男女だらう。「淡く重なる」が、うまい。

七五三御祓い終えて愛想良く紙芝居する若き巫女さ 三宅徹夫

スケッチふうな軽い作品ながら、対象を見る目にあた

たかさが読めて、読者をなごやかな気分誘う。泣きぬれたる心抱くなど言ひし母よまこと泣きぬれしことなかりしか 白岩裕子